

糸所より奉りて御帳にかけられ群臣にも給はる事あり司々にて是をまうくるよしは延喜式にみえさて帶るさまなどは小野宮年中行事等に出たるがごとしさるは糸所奉れる薬玉を去年の九月九日に御帳にかけられたる薬草の囊、かつ御前におかれたる菊瓶などともにとり拂ひて、薬玉にかけかへて、九月まで是をおく事とぞさてかくる所は夜の御殿の御帳の東の柱にかくるよしなり、そもノ、皇朝にも此日薬玉を用ふる事は邪鬼をはらひ疫をのぞく術にて民家にも五月五日婦女子の観ものに色々の造り花を糸につけ紙にて張などしてもてあそぶはもと禁中にせさせ給ふを習ひて、下々にもなすこと、みえたり。

〔世諺問答〕五月問て云、同此日○五薬玉とてかくるは何のゆへぞや、答、凡けふをば薬日といひて、一切の薬をばこの日とるなり○中さればけふ薬草を五色のいとにてと、のへて、ひちにかくれば、惡氣をはらふとも申本文侍るにや、公にも群臣に薬玉を給事の侍るなり。

〔夫木和歌抄七  
五月五日〕家集夏歌

くすりびのたもとにむすぶあやめ草たまつくりえにひけばなるべし

惠慶法師

〔雲州消息〕今朝自或所給薬玉一旒作以百草之花貫以五色之縷摸草虫形栖其花房芳艶之美有興有感、古人云、此日懸續命縷、則益人命云々若此物之謂歟、欲報賽之處忽無其物、唯綴和語聊可答謝、纔雖成篇什未猶弁首尾爲承取捨之訓說先以進覽幸加一字不屑千金者歟、事是嗚呼也莫及外聞謹狀、

五月五日

兵部大輔殿

權右中將

〔安齋隨筆前編十二〕一薬玉

今世京都に在る薬玉、右の體也、今在ルハ紅白のツ、ジの花糸なり

艾草菖蒲を少結付て、花枝の中央に玉あり、香物を合たるカケ香也、草虫の形はなし、五色の糸